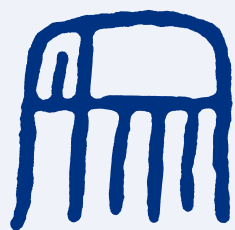


同窓會報



〒610-1197 京都市西京区大枝杵掛町 13-6
 京都市立芸術大学美術学部同窓会 象の会
 発行人：同窓会会長 上村 淳之
 TEL/FAX 075-334-2218
 携帯 /090-7353-6999
 http://www.kyogei-ob.jp
 E-mail info@kyogei-ob.jp



2018.2.7wed-11sun (入場無料)

午前9時—午後5時 (入場は午後4時30分まで)
 美術科・工芸科・総合芸術学科 デザイン科
 京都市立芸術大学 京都市美術館別館 元崇仁小学校

2018年2月7日(水)～11日(日) 会場／京都市立芸術大学構内
 京都市美術館別館
 市美術館改装工事のため会場が分散します 下京区：元崇仁小学校

京都市立芸術大学移転整備に向けた動き

「京都市立芸術大学移転整備基本計画」に基づき2017年度から、移転後の新キャンパスの設計が始まりました。

設計に当たっては、創造性あふれる提案力を持つ設計者を広く募るため、京都市において公募型プロポーザルによる受託候補者の選定が進められ、審議の結果、設計者に、「乾・RING・フジワラボ・o+h・吉村設計共同体」が選ばれました。

現在、本学や地域との対話を重視した設計が進められており、2019年度末までに基本設計・実施設計が完了する予定です。その後、2020～22年度にかけて建設工事を行い、2023年度の新キャンパスオープンを目指しています。

その一方で、移転整備完了までの期間、移転予定地を中心に、移転の機運を高め、地域との交流を深めていくため、本学では2014年度から移転整備プレ事業を展開しています。

同事業においては、地域のイベントに参加して、演奏やブース出店等を行っており、2月に開催の作品展では、移転予定地に所在する元崇仁小学校も会場の1つとして作品が展示されますので、是非お立ち寄りください。(総務広報課)



新キャンパスイメージ(設計者提案より) 本イメージは、設計者選定のための課題に対する提案であり、提案内容がそのまま設計案になるものではありません。

【設計者の概要】 以下の5社による設計共同体

代表者	有限会社乾久美子建築設計事務所
構成員	株式会社 RING ARCHITECTS
	株式会社フジワラテッペイアーキテクツラポー級建築士事務所
	一級建築士事務所大西麻貴+百田有希/o+h
	株式会社吉村建築事務所

Head line

京都市立芸術大学移転整備に向けた動き	1
同窓会展開催	2
「サイレントアクア」(2018年度休止)	2
「同窓会賞」の賞状デザイン決定	3
第5回芸大祭模擬店「象の店」	3
同窓生だより《部活／記憶の彼方》	4
研究室だより 環境デザイン専攻研究室	6
プロダクト・デザイン専攻研究室	7

退任にあたって	8
芸大移転地の期間限定屋台村レポート	8～9
Relay Talk「象の会・いろあわせ」	9
会員展覧会	10
学内消息(資料)	11
事務局だより	12
編集後記	12

同窓会展開催

「部屋とギターと眠らない夜——1990年代前半を中心に」

会 期：2018年2月17日(土)－3月4日(日) 11:00－19:00(月曜休館) 入場無料

会 場：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA (中京区御池堀川東北角)

東西ドイツの統一と冷戦終結、ソ連解体とグローバル化の加速、湾岸戦争での多国籍軍によるイラクへの攻撃など、その後の国際社会を大きく動かしていく出来事のあった1990年代前半。日本国内においても、バブル経済のピークからその崩壊、そして阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件と、人々に大きな衝撃を与えた現象や出来事のあった激動の時代でした。

美術界の動きとしては、このような社会の動きからか、自らの新たな立ち位置を模索するような傾向が見られるようになります。例えばニューヨークやロンドンのアート・シーンで80年代から広まり一世を風靡していた、既存のイメージをカットアップ、サンプリング、リミックスして表現に取り込んでいくシミュレーションイズムに注目した美術評論家の榎本野衣による『シミュレーションイズム——ハウス・ミュージックと盗用芸術』が1991年に出版されると、若い世代の作家たちに特に大きな影響を与えました。ポップ・ミュージックやポップ・カルチャーなどとアートが結びついていくポスト・ポストモダンの思想は、バンド・ブームの中で育ってきた若者たちにとって、アートの世界と自分との接点とその広がりを感じさせるもの、とてもリアルなものであったがゆえに、彼らの心を射抜いたのだと言えます。また、これまで若手作家は、そのキャリアを積んでいく中で貸画廊を借りて展覧会を開くというのが主流でしたが、そうではなく、オルタナティブな作品発表の場所を自分たちで開拓していくような動きも活発化していきました。こうした流れの中で、本学学生たちも、学生の下宿アパートなど様々な場所を展示の場として使用するようになります。

90年代前半は、バブル崩壊から「失われた20年」とも呼ばれる長く続いた不景気の始まりというネガティブなイメージで捉えられがちな時代でもあります。本展にて展示される、当時の本学学生の手による作品からは、この時期特有の若き表現者たちの躍動感、高揚感を見て取ることができます。皆様のご来場をお待ちしております。

なお、前回の同窓会展に引き続き、資料研究の発表の場としての「アーカイバル・プラクティス・ラボ」の公開も合わせて実施致します。合わせてご高覧いただけましたら幸いです。(学芸員：藤田瑞穂)

出展予定作品：

- 山下華世子「冬華」(1991年度日本画専攻卒業作品)
- 岡村寛生 「ジャーマン・スープレックス・ホールド」(1991年度油画専攻卒業作品)
- 福井敦子 「in surprise」(1991年度版画専攻卒業作品)
- 渡部睦子 「星へゆくための家」(1991年度陶磁器専攻卒業作品)
- 北原美保 「炫耀(蒔絵螺鈿硯箱)」(1991年度漆工専攻卒業作品)
- 金田勝一 「ウルトラ チョイス」(1992年度油画専攻卒業作品)
- 舌 忠之 「微刺激の空間づくりー都市の家ー」(1992年度環境デザイン専攻卒業作品)
- 山田道夫 「Blue goes to his office everyday-3」(1992年度大学院美術研究科絵画専攻版画修了作品)
- 竹ノ内郁 「増殖の法則 1」(1992年度大学院美術研究科工芸専攻陶磁器修了作品)
- 川田有宏 「生活圏交通システム”MST”」(1993年度プロダクトデザイン専攻卒業作品)
- 山元彩乃 「夜宇宙」(1993年度染織専攻卒業作品)
- 植田隆太 「Vermin(No.00)」(1994年度構想設計専攻卒業作品)
- 藤田匠平 「ウマレタテノイシヲヒロッタ」(1994年度大学院美術研究科工芸専攻陶磁器修了作品)
- 辻野陽子 「永劫回帰」(1994年度大学院美術研究科工芸専攻染織修了作品)
- 中村奈緒美「DRESSING」(1995年度漆工専攻卒業作品)
- 佐藤有紀 「ノータイトル」(1995年度大学院美術研究科絵画専攻油画修了作品)
- 豊永政史 「知覚・その写真」(1995年度大学院美術研究科デザイン専攻修了作品)

【関連イベント情報】(会場にて)

ギャラリートーク：2月17日(土) 14:00－15:30

オープニングレセプション：2月17日(土) 16:00－

災害復興支援・芸術活動支援チャリティーオークション「サイレントアクア」(2018年度休止)

京都市立芸術大学サイレントアクア実行委員会では、2011年よりチャリティーオークションを通して東日本大震災の復興に関わる活動をしている団体等を広く支援してきました。本学の学部生、院生、留学生、教員(非常勤含む)、旧教員、卒業生、修了生が作家名を伏せた匿名で、新作をギャラリー会場とウェブサイト上で公開し、入札を受け付けるという本オークションは、毎年好評のうちに多くのご来場者にご参加いただいております。

その一方で、近年は作品の出品数が年々減少しており、また支援先団体についても、法人格を解いて活動に一旦区切りをつけ、個々に被災地に移住して地域に根ざした活動へと切り替えていくような動きも見られるなどの変化が出てきました。そこで、実行委員会では、昨今の事情を踏まえながら、従来通りの

事業内容で継続して実施していくことが最善かどうかの議論を重ねてまいりました。その結果、2018年度については「サイレントアクア」の実施を休止し、今後どのような活動を行うことが息の長い被災地支援になるのかを慎重に検討した上で、2019年度より事業内容を刷新して再開することと致します。長きにわたりご支援ご協力を賜っております同窓会会員のみなさまに、このようなご報告を致しますのは心苦しい限りではございますが、未来に向けて前向きに取り組んでいくための策として、どうかご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

なお、今後の展開につきましては、改めてご報告を致します。

京都市立芸術大学サイレントアクア実行委員会
実行委員長 鶴田憲次

「同窓会賞」の賞状デザイン決定

大学作品展「同窓会賞」が昨年から卒業式場で授与されています。同窓会は、それを期に賞状デザインを新しく独創的なものに替えることにしました。昨年11月から年末まで同窓生、学生、教員を対象にデザインの公募を行ったところ、2名の学生から6点の応募があり、本年1月に選考委員会(委員長:望月重延副会長)を開催して次の採用作品を選びました。今年度(2017年度)の作品展から新たなデザインの同窓会賞賞状を使用します。

作品展同窓会賞 賞状デザイン採用作品(1点)
美術学部デザイン学科ビジュアルデザイン専攻4回生
郡司 穂子さんの作品(写真)



第5回芸大祭模擬店「象の店」

昨年の芸大祭(11月3～5日)で同窓会は、模擬店「象の店」を開店しました。今回で5回目を迎え秋の行事として結構馴染んできたようです。規模も大天幕2張の面積となって収容人員も増えました。メニューは当初から変わらず美味しいお酒と湯豆腐の店>として定着しています。昨年、身体の調子が悪く参加できなかった店主(上村淳之同窓会長)も今年はすっかり元気になられ初日(3日)に顔を出していただけました。多くの現役学生や保護者、教員に囲まれ話が盛り上がり、現役学生と同窓生の交流がさらに深まったように思います。また、昨年同様、ラグビーやサッカー部の現役OB交流の場も設定され、閉店時間まで盛り上がりました。

初日には読売新聞の記者さんが、同窓会上村会長について取材に来られ、皆と一緒に「象の店」の雰囲気を楽しんでいただきました。その記事は、読売紙12月8、9日朝刊の「美を継ぐ上村三代」に掲載されていますのでご覧ください。

今年の秋も6回目の「象の店」を開店する予定です。同窓生各位のご参加とご支援をよろしくお願いいたします。



今号から「同窓生だより」を《部活／記憶の彼方》のテーマでシリーズ化します。昔、活動していたが今はもう消えてしまった部活動の思い出を同窓生に語っていただこうと言う企画です。今号は「探検部」を取り上げました。

部活も栄枯盛衰があり、時代・世相を如実に反映してきています。戦前の絵専、美工の時代は撃剣部、射撃部、馬術部などが記録され、戦後はアトリエ座、フランス文化研究会、英会話ESS、マルクスレーニン主義研究会、日中友好協会など文化活動が盛んになりました。部・サークルが最も多く生まれたのは、昭和30年代終わり～50年頃で、百花繚乱の様子でした。大学が今の大枝に移ってから、それまでの部が徐々に消えていきましたが、ラグビーや野球、テニス、サッカー、バレーボールなど体育系部活の多くは今も継続しているようです。（「芸大100年史」参照）

「私も一つ語ってやろう」と思われた方、是非とも同窓会事務局へ連絡ください。

探検部

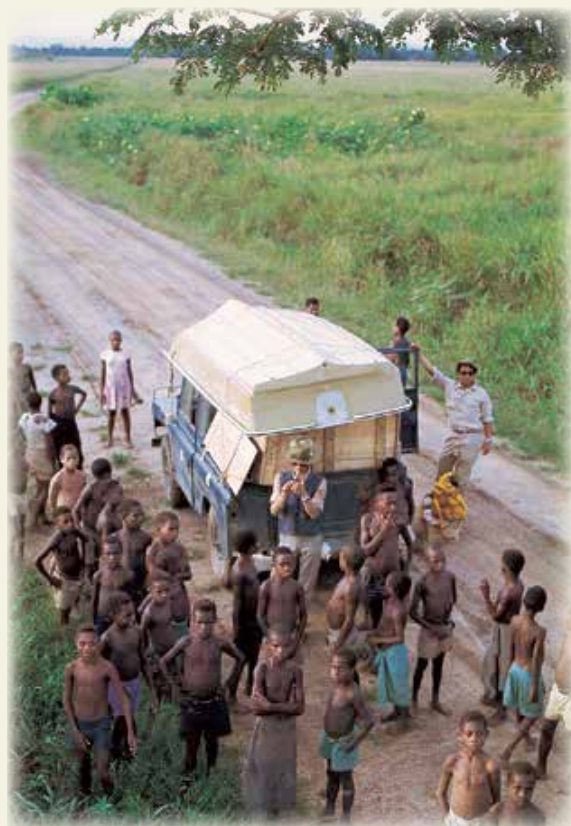
福本 繁樹（1970年専攻科西洋画専攻修了）

1968年の4月、京都市立美術大学（現京都市立芸術大学）の第一講義室に百名近い学生が新学期の「原始美術論」の授業を待ち受けていた。定刻になって講師がさっそうと姿をあらわしたとき、教室内が驚きで騒然となった。サハラ砂漠2万5000キロの探査行（京都大学大サハラ学術探検隊）から帰ってきたばかりの講師の顔が日焼けで異人種のように黒かったからだ。野性的で精悍な顔は、地味なスーツ姿や教壇にミスマッチで、教室はやがて満場爆笑となった。講師は「行動する芸術学者」の異名をとる木村重信助教授、なかなかおさまらない嘆声を意に介さないかのように早口で朗々と講義を展開した。

先史美術、民族芸術研究と、現代美術評論にとりくむ木村重信先生は、世界を股にかける精力的な活動をつづけた。「美術史家はしばしば探検家でなければならない」なぜなら「百聞は一見にしかず、現地の人びとの造形活動の息吹を直接肌でふれる必要がある」と。しかしまた「心ここにあらざれば、視れども見えず、聴けども聞こえず」とも。

その2年前の1966年、「わが大学にも探検部があるべきだ」と先生がおっしゃり、私は数人の仲間とともに大学に探検部を結成した。当時、私が所属していたワンダーフォーゲル部は数十名の部員を擁する、学内でもっとも活発なクラブだった。沖縄でイリオモテヤマネコが発見されたことが話題となったので、馬場章夫、小林健三と私の3名がすぐさま春休みを利用して沖縄をめざし、2週間あまり旅をした。西表島までたどり着いたのは1966年の4月だった。天気によければ西表島西岸から台湾の島影がみえる。さらに遠くは「外国」だと実感して帰ってきたばかりだったので、数名のワンゲル部員が木村重信先生の言葉に背中を押されるように探検部結成に勢いづいた。

創設時の部員は、馬場章夫（初代部長）、中島太意、大野護、山本潮子と私（二代目部長）の5名、当時のワンゲル部の国内活動から海外活動へとめざす者の集まりだった。1964年の海外渡航自由化もあり、1960年代は各大学の探検部が競うように活躍する「探検の時代」だった。そのころ富士山麓で全国の大学探検部の集会があり、私も参加した。第一線で活躍している国内探検家たちの熱いおもいが充満する合宿だった。探検の初心者としてまずそこで教えられたのが「パイオニアワーク」と「アマチュアリズム」



セビック地方をゆく京都市立美術大学ニューギニア美術調査隊。
1969年。車の右に近藤豊講師、前に山本保

だった。

国内の比良山や平ヶ岳縦走練成登山、台湾の孤島蘭嶼のヤミ族（1966年、馬場章夫、大野護ら）、ミクロネシア（1967年、秋野不矩教授、馬場章夫、中島太意ら）などの探査活動を経て、探検部の学生が計画をすすめていたニューギニア美術調査隊の企画が、探検部顧問の木村重信先生の指導もあり、1969年に京都市立美術大学でとりあげられた。満岡忠成教授を隊長に、寺田勇教授、近藤豊講師、それに山本保、堤淑子と私の学生を加えて6名が探検隊メンバーとなった。総予算は600万円、当時の同級生の初任給が3万円以下だったので、現在の数千万円に相当する額だ。全学で取りくみ、隊員が奔走した結果、高度成長時代とあって、出版社や企業などからの寄付金でなんとか費用が集まり、7月7日～9月14日までの70日間の探査行が実現した。このとき収集した仮面、神像、土器、民具などの民族資料約320点は、京都市立芸

キャビンクルーザーでパプアニューギニアのセピック河をゆく。1971-72年。ボート上の人物は左より大野護、筆者、山本潮子



術大学芸術資料館の所蔵品となっている。

民族美術の宝庫といわれるセピック河地方を訪れると、広大な湿地帯に点在する村々に壮麗な儀礼用建築がある。ワシク地方の精霊堂の天井には約5000点の樹皮絵画が貼りめぐらされ、ミロやクレーを思わせるシュルレアリスムの世界が圧倒的な迫力で躍動していた。美術大学でエリート教育をうけたはずの私だが、ニューギニアの人々の芸術におよばないことを思い知らされた。

南太平洋美術を熱狂的に支持したのは百年あまり前のシュルレアリストたちである。彼らを啓発し鼓舞したのはループルよりも人類学博物館だった。シュルレアリストばかりでなく、立体派、野獣派などの芸術家、あるいはオリエンタリズム、シノワズリ、ジャポニスムの流行など、異文化の要素を摂取したあたらしい表現が近代美術に展開した。

卒業後も南太平洋美術探査をくり返した私ではあるが、シュルレアリストたちのように、南太平洋美術の特質を自分の作品にとり入れることは、なかった、というより、できなかった。シュルレアリストたちが観たのは人類学博物館に陳列された、南太平洋

美術の形骸だが、私は現地にとびこみ、大自然と人々の生活の中に生きている美術をみた。南太平洋の人々は、芸術によって自らのアイデンティティを確立している。真似るべきは、外面的な形式ではなく、本質的なあり方である。借り物ではなく、自らの本音としての作品を創り出さなければならない、南太平洋美術は私にそう教えた。「現地の人びとの造形活動の息吹を直接肌でふれ」た結果だった。

探検部初期の部員として、他に団野道子、前田祐子、須田勝嶺仁、吉本忍(三代目部長)、今西方哉、富家真美らがいた。人名、肩書は当時のもの、敬称略、メンバーなどは、当時の確かな記録がなく全員記せなかったことをお許しいただきたい。

その後のわが探検部の活動については全貌を把握していないが、世の中は経済成長とともに海外旅行が一般化し、エスニックブームも到来した。「探検」は極北や未踏峰をめざす地理的探検や、学術的な民族学調査へとより先鋭化し、「世界旅行」がテレビなどのルポでおなじみになって一般化するとともに、大学探検部の活動はめざす目的を見失うかのように全国的に低調になっていった。

◆8月18日(水)→22日(日) / 本館8階催場(入場無料)

原始の美

ニューギニアの仮面と土器展

主催 / 京都市立芸術大学 後援 / 毎日新聞社・大阪府教育委員会・大阪市教育委員会 協賛 / オーストラリア大使館

人頭面 藤製の藤面 土器 祖先像

出品内容:
密面(藤面、人頭面)、祖先像、藤、樹皮粉画、串珠(手持ち太鼓、大太鼓)、工芸品(腰かけ、笛、首飾り、小刀)、土器など
＊あわせて現地の生活、風俗などを写真、スライドで紹介

原始の美、ニューギニアの仮面と土器展、心斎橋大丸、京都市立芸術大学主催、1971年開催の案内はがき

環境デザイン専攻研究室

藤本 英子

環境デザイン専攻 教授

地域に根ざした京都からの学び

京都という環境は、学生たちにとって教育面でも生活面でも、大変恵まれた場所になっています。特に環境分野では、文化財など歴史的資産から、日本庭園など今も匠の技術で引き継がれている現場が、すぐ近くにあることで、身近な街の中で体験し、学ぶことができています。環境デザイン専攻でも近年、このことを活かし、積極的に京都から学び、京都に提案をする授業に取り組んでいます。

デザイン基礎を終えた3回生では、家具やインテリアの分野に取り組み、住宅や店舗と少しずつそのスケールをあげた課題に取り組んでいます。昨年より京都市内でホテルを展開する事業者への提案を、現状の課題などを現場で学びながら行っています。学生たちの設計技術はまだ伴いませんが、新鮮な発想やその展開が、次の現場に活かされていくことでしょう。

学生たちはそれぞれ、自分の感覚的に取り組みやすいスケールがあるようです。4回生では卒業制作に向けて、自分なりの課題を発見し、家具から地域計画まで、それぞれのスケールで取り組んでいます。

学部、大学院共に取り組む授業もあります。伝統建築や日本庭園の専門家として現場で事業を行っておられる先生方にも、外部から来ていただき、現地見学会も定期的に続けています。一般では入れない場所や、専門家からの学びは、現場ならではの学外授業となっています。

学びからの提案へ

京都のまちから学んだ学生たちは、その提案をまたまちに戻していきます。昨年は大学から近い洛西ニュータウンの市営住宅で、若い世代に向けたリノベーションの提案を大学院生たちが取り組み、その提案は具体的な設計案として 55 戸に展開されました。時折、京町家に住み、自らリノベーションを手がけながら、それを作品としていく学生もいます。

提案先は京都に限りません、専任の坂東先生が関わられている徳島県の出羽島や、三好市での提案など、広く活動範囲を広げています。



市営住宅リノベーション市長への提案

私たち専攻が抱える課題

様々な地域でのまちづくりも広がり、地域からの要求も多くある環境デザイン分野ですが、3回生で決定するデザイン科内の専攻選びでは、選択してくれる学生が少ないことが、継続的課題となっています。1回生のアンケートで、希望者ゼロからのスタートの年もありますが、デザイン基礎の課題で関わりながら、環境デザインの魅力を伝える努力をしているところです。



崇仁地域「屋台カフェ」地域の方々へのプレゼンテーション記念写真

また、就職活動においても課題を抱えています。学生たちが目指す建築設計会社などでは、工学部の建築科など、1回生から設計課題に取り組んでいる学生たちに比べると、技術面では遅れ、作品としてもその数がなく、就職活動の早期化も相まって、大変厳しい状況に立たされています。しかし、活躍する先輩たちのおかげもあって、学生たちの基礎技術力、考える力への評価は高く、そこに人間性への評価が重ると、スムーズに内定を頂いています。就職するだけが社会での活動ではないことと、個人の生き方の選択にも関わるところなので、個人の資質に応じたガイダンスを心がけているところです。

地域連携、現場での学び

京都市立の唯一の大学としての役割も様々な場面で求められています。京都市営地下鉄では毎年多くの市内の大学と連携で、「駅ナカアート」プロジェクトを展開しています。本学は @KCUA に近い二条城駅で、ここ数年は本専攻の学生が作品を展示しています。今年も3月末より5月までご覧いただけます。昨年は京都で行われた「世界照明探偵団」というイベントに参加し、海外から参加した10名の照明デザイナーとともに、ライトアップを行いました。本専攻は平安神宮の応天門を担当し、プロの技術も学びました。その他、京都市の「京の七夕」や「東山花灯路」にも、毎年作品を展示しています。

いよいよ崇仁地区への移転まで、5年余りとなりました。設計者も決まりこれからの授業は、まさに環境デザインを学ぶ臨場感ある現場であると捉えています。現在、旧崇仁小学校を活用した地域まちづくりへの参画にも取り組みつつあります。2年ほどでの小学校校舎も取り壊されることとなりますが、地域の方々の思い出に残り親しんだこの建物があるうちに、私たち次の生活者とともに行う活動こそが、重要だと考えています。旧職員室をギャラリーにするリノベーションは大学院生の作品となり、本年度の制作展では、環境デザイン専攻展示の全てを、小学校内で行うことにしました。ぜひ、お見逃しなく。

大学建設敷地では2月に「崇仁新町」という仮設商業エリアがオープンします。ここの設計にも学生たちが参加しました。先日、地域には老人も多く外出も控えがちだ、という地域課題に学生たちと取り組みました。移動する屋台カフェ(カーゴバイクを利用)を、2回生デザイン基礎の環境デザイン課題で、2台作成しプレオープンに合わせて、繰り出しました。地域の方も集ってくださり、共に語り合う場作りに貢献しつつ、同時に学生たちの生の学びの現場が出来上がりました。こうして、頼もしい学生たちが育っています。今後も様々な現場での学びと発表の場を作り上げていく授業を続けたいと思っています。

プロダクト・デザイン専攻研究室

高井 節子

プロダクト・デザイン専攻 准教授

社会システムが変化し従来のものづくりにも大きな変化が訪れる時代にプロダクトデザインの学びとはどうあるべきか？を問い、試行錯誤しながら、学生も教員も、制作に授業に、日々奮闘しています。その様子を少し紹介させていただきます。



2017年度のプロダクトデザイン専攻学部生は4回生8名(男3:女5)3回生9名(男5:女4)です。今年度は久々に男性が多く、私の在学中(1990年代前半)のようなものづくり大好き学生がわいわいする賑やかな雰囲気があります。とはいえ、その頃のプロダクトデザイン専攻といえば自動車か家電のデザインを志す学生が主流でしたが、最近はその方面に興味を示す学生が少なくなりました。家具などの生活に身近な道具や、モノ中心ではなく人間らしい生活そのものをいかにデザインしていくか、さらに、モノがあふれる現代においてモノの存在そのものを問い直すことに興味の中心があるようです。課題でも、プロダクトという従来のアウトプットの垣根を軽々と超えています。研究室では、そういった時代の変移や学生の思考に対応すべくカリキュラムのあり方やプロセスを柔軟に変化させていく試みを一部始めています。

例えば、3回生後期の授業では、「コミュニケーションとモノ作り体験をデザインする」グループ制作(担当:吉田朝麻先生)を実施しました。芸祭模擬店を企画し来場者がお面づくりをする「わくふわおめん」ワークショップ(写真①)は、通常課題のように提案して終わりではなく、実際に人が集まる機会を使い、実践的アプローチからデザインの可能性や価値を見出すことを狙いとしました。お面づくりのワークショップは、簡易な真空成形加工方法を利用して、用意したプラスチック板を熱で加工し、絵の具やマーカーで着色します。地域の子供達から卒業生まで幅広い年代の方々が楽しんで参加してくれました。学生にとっては模擬店から真空



①



成型機までを手作りする課題プロセスを経て、お面づくりを通じて生まれる体験をデザインする面白さ、コミュニケーションや場をデザインする難しさと楽しさを学ぶ授業となりました。

また、2017年5月3日～7日までギャラリー モーネンスコンピス(モーネ工房 京都)にて、プロダクトデザイン専攻卒業生と在学生有志による「うつわづくり-プロダクトデザイン初めの一步」展(写真②)を開催しました。プロダクトデザインでは3回生前期に、



②

石膏型による泥漿鑄込み加工法を使った「器」のデザインと制作の授業(担当:井上正憲先生)を実施しています。この授業は、プロダクトデザイン専攻に入り始めて実際に自分が使用できる器を制作します。デザイン基礎で培った造形力や発想力がしっかりとモノの魅力となって現れ、使う喜びを得られる課題の一つです。展覧会では2007年から2016年までの10年間、授業で制作した学生の器がモーネ工房に集まり、全年代の作品を展示しました。会期中には、先輩後輩が同じ課題を通じて交流し、新たな繋がりを生む機会になりました。世代を超えて思いに共感し励まし、大学で得た何かを確認する幸せな時間を共有できたこと、研究室の存在がその器になれたのは嬉しいことでした。その一方で、デジタルテクノロジーが産業や生活に浸透してきたことから生じる変化の中でプロダクトデザインを学んだ若い卒業生も在学生も難しい時代を生きています。今回の同窓生と



②

の交流は大学での現状カリキュラムや教育の仕組みに対してさらに問題意識を持つ契機ともなりました。

現在、これからのプロダクトデザイン教育のあるべき姿を考え、大学移転に向けて、プ

ロダクトデザイン研究室の将来のあり方検討チームを立ち上げました。研究室では、新しい力として2015年10月から牛田裕也先生をお迎えし様々な新しい試みにもチャレンジしています。京芸の良いところを継承しつつも新しく強く未来を描ける専攻、研究室を目指していきたいと思っています。

退任にあたって

共通教育 宇宙物理学 教授

藤原 隆男



芸大とわたし

私の中学校時代の担任は数学と美術を教えていた。その先生にかわいがってもらったので、美術は好きな科目だった。のちにオーバードクターをしていたころ、掲示板で京都芸大の物理教員の公募を見つけてすぐに応募したのは、私にとって美術と科学が近かったからだろう。そうして芸大にきたのは、ハレー彗星が接近する前の年のことだった。天文屋の私が選ばれたのは、私にハレー彗星の話をさせるためだったにちがいない。

私はマイペース人間で、自分が興味を持ったことしか一生懸命になれないので、芸大では好きなことだけをしてきたような気がする。ただ、しんどいことにはまってしまうこともあった。とくに1994年に芸大をインターネットに接続したときは、サーバの守りからウェブサイトの構築と運営、はては学内のケーブル敷きまでたいへんだった。苦勞の甲斐あって、全国の芸術系大学の中で

ウェブサイトを最初に立ち上げたのが京都芸大であったことだけは記しておきたい。

芸大で印象に残っていることといえば、テーマ演習や共同研究でいろんな専攻の先生や学生と知り合えたことであろう。JAXA(旧NASDA)との共同研究では、ヒューストンで宇宙飛行士のみなさんと談笑したことが思い出される。この数年間参加した「奥行きの感覚」のテーマ演習はとりわけ楽しかった。私は実技試験を経ずに芸大にきたという引け目をずっと感じていたが、奥行きのテーマ演習で学生や実技の先生といっしょに制作に励んでいるうちに、ようやく芸大の教員になれたような気がしてきた。せっかく芸大の一員と思えるようになったときに退任を迎えてしまうのは残念なことだ。

最後に、何者かもわからない私を受け入れ、きょうまで支えてくださった教職員、学生のみなさんには感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

日本画専攻 教授

西田 真人



大学に職を得る直前の一年程は一回目の手術に続く抗がん剤治療。そして肺への転移で11月に二度目の手術。翌年の4月から日本画研究室教授に就任しました。まずは無事退職を迎える十年を生きれることが一つの願いでした。もちろん育てて頂いた大学で若い学生達に有用な指導ができる事は、もっと大切な願いでした。ただ退職の時期に至って言葉足らずの指導でどれ程、学生達に語れたか・・・と反省頻りです。また私の不徳で思いの外、他専攻の先生方と語る時間の少なかった事も悔やまれます。

哲学者・教育者の森信三さんが色々含蓄のある言葉を残されていますが、その言葉の一つ「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える しかも一瞬早過ぎず、一瞬遅過ぎない時に」大学在職の10年での先生方、事務方、学生達の中には、その逢うべき人が何人か居られるのかもしれない。いや今後「逢うべき人」となる伏線にあるのかもしれない。退職していく私に大学に貢献できる事はさほど見つかりませんが、日本画家としての創作意欲は益々旺盛で良い仕事をする事で、大学に恩返しが



退任記念 西田真人展（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA）

できればと思います。また在職中に関わった学生達に陰から援護ができればとも思います。

来年10月から神戸の美術館を皮切りに「全国一の宮を描く（仮称）展」を致します。初めの展覧会では32社のスタートですが、全国巡回の一年ごとに12社を描き足し6～7年で北は北海道から西は沖縄までの103社描破を目論んでおります。退職後は富岡鉄斎の座右の銘の如く「万卷の書を読み万里の路を行って・・・」の旅と制作の日々を送り103社を描き切るまでの生を願っております。

芸大移転地の期間限定屋台村レポート

2017年12月22日金曜日。京都市立芸術大学が本格的に移転を始めるまでの2年半を生かした、期間限定の屋台村「崇仁新町」のプレオープンにお邪魔してきました。

（編集委員：徳永杏子）



お昼前に着いたのですが、大きな看板が出迎えてくれました。立地も人通りのかなり多いところ。通りすがりの観光客も興味深げに立ち止まったり中を覗いたりしています。



象の会・いろあわせ

同窓生が同窓生を紹介し、リレーしていく近況報告のコーナーで、懐かしい人と出会う楽しみ、いつか自分に廻ってくるかも知れないドキドキ感のある連載です。

たきぐち まさる
滝口 勝

1964年(昭39)彫刻科卒業、1966年(昭41)専攻科卒業
ラグビー部



2014年ヒューストンダウンタウンのエネルギー会社Total Plazaの展示室でキュレーターと

画廊主である傍らヒューストン大学で教鞭を取っていたKさんが、日本人作家の本を出版する為来日し美大に先生方を訪ねて来たのが1965年。間違えて私の部屋に入りその1年後作品を送らないかと国際電話。送付した作品は、ヒューストン市美術館で、グループ展に出品。数年のつもりで来ないかと誘われ、見本市船桜丸でここへ来て早50年。

6か月毎に米国外へ出なくていいように移民ビザ申請。書類提出の際ニューヨークで作家活動されていた児玉先輩より出来るだけ作品蒐集家から推薦状を集め移民局へ提出したら良いとの助言。ビザ入手1年後の1973年画廊は、破産。同年移った画廊は、作品買い取りの為作家活動が、続けられた。

最近、3か所の非営利画廊と1988年から属している画廊での展覧会では、手持ちの木彫、石彫を出品。2009年にパーキンソン病と診断され、特にここ数年筋力が衰え制作活動に支障をきたしていますが、リハビリと気功をしながら制作が続けられれば幸いと思っています。



次号で紹介される方は、

こだま まさみ
児玉 正美さん

1956年(昭31)彫刻科専攻卒業です。

すぎもと まさゆき
杉本 昌之

2013年(平25)油画専攻卒業



「オーシャン 波さがしてっから 2017.5.19-6.4」

「絵の近況」

現在、京都市立芸大移転に向けた小大連携の取り組みとして、2015年10月から京都駅近くの下京渉成小学校の教室をお借りして作品制作を行っています。小学校に通い始めてもう3年目になり、子ども達の成長も楽しく眺めています。3月には毎年恒例の子ども達の図工展に参加させて頂きます。

また、2016年7月より出町柳「GACCOH(ガッコー)」にて「みずいろ絵画教室」を開いております。「GACCOH」は哲学・科学・芸術・様々な分野の講座やイベントが開かれる文化交流スペースです。「みずいろ絵画教室」では子どもから大人までオリジナルなやり方で絵画に取り組んでいます。

近々の活動から一つ。昨年の11月、奈良県生駒市高山地区にある「里山きゃんぱす」にて野外作品展「この世界にふれる時」を行いました。企画は葛本康彰さん、Kim okkoさん (ubeful gallery)。「里山きゃんぱす」とは同志社大学経済学部岸ゼミが再生・保全を行っている里山です。3年前から里山の収穫祭に合わせて芸術イベントが企画されており、これまで野外演劇や演奏会が開催されています。今回の作品展では林の中に絵を飾り1日限りの里山美術館を作り上げました。

報告ばかりになりましたが、卒業後も作家として続けられているのはひとえに出会った方々とのご縁に尽きます。今後も精いっぱい自分なりに絵に携わっていきます。



次号で紹介される方は、

もとやま
基山 みゆきさん

2011年(平23)油画専攻卒業、2013年(平25)絵画専攻(油画)修了です。



看板の左側には、新鮮な野菜などを販売するブース。とてもリーズナブルに産地直送のお野菜が手に入るということで、沢山のお客様が品定めをしていました。



今回は、あくまで「プレオープン」。本格的なオープンは2018年2月だそうです。そして今回出店されていたお店は、ほとんどが入れ替わり、新しいお店が入る予定とのこと。今までにない、新しい「街の形」が生まれる予感がします。

限られた2年半という時間の中で、沢山のふれあいや挑戦が生まれてくれれば良いなと思いました。

会員展覧会

(2017年2月～12月) ■同窓会にお知らせいただいた展覧会情報です。同窓会のホームページにも掲載しています。

会員作品展		
3/11～23	河合美和展	ギャラリー島田 ①
4/6～14	重岡良子展	京都市国際交流会館別館
4/6～16	樋上さや子展	～春日～ギャラリー石堀小路和田 ②
4/25～30	松本静明展	アートスペース虹
5/9～14	石田有作	白磁展ギャラリーマロニエ
6/20～7/2	岡田親彦 ガラスとことば遊び展	あーとさろん宮崎
5/30～6/4	福田季生 日本画展 一星降る夜の夢ー	ギャラリー恵風 ③
6/13～18	業師寺智子「ローズウィンドウの世界」展	セントラル・アートギャラリー
6/19～7/1	長谷川睦展 いきづく空間ードローイングのように	ギャラリー白
7/6～11	二階堂忠展	ギャラリー樹
7/21～8/1	安藤譲治 一枚の紙から生まれる動物たち展「夏の夜の夢」Part 2	茶屋町画廊
8/26～9/17	長谷川直人展	ギャラリー器館
9/5～16	Biosphere 人長果月展	galerie16 ④
9/11～16	河合美和展	ギャラリー白
9/25～30	善住芳枝展	ギャラリー白 ⑤
10/3～8	高谷光雄展	ギャラリー中井
10/9～14	高田哲士展	画廊宮坂
10/16～21	山田俊行展	かさなりギャラリー白
10/23～29	by 吉田恵美子	月光荘 画室2
11/14～19	荒瀬隆造油彩画展	広島三越
11/15～20	河野裕子個展 ー物想いの秋ー	art Truth
11/16～26	田中直子展	あーとさろん宮崎
11/23～28	安藤ようこ個展 百のねことコラボレーション vol.7	茶屋町画廊
11/27～12/9	松本静明展	ギャラリー白
会員グループ展		
3/27～4/2	第31回象展 青木弘年、阿部友子、安藤邦典、川上博子、河野裕子、高見澤美代子、寺田茂樹、中越出、二階堂忠、平島光、藤田清照、古川睦子、前垣内輝行、水沼伴次、水速信孝、安森正子、柳和子、柳田輝子、山崎和代、山本加代子、横井智恵子、吉田敏子、吉田弘幸、依田鏡子	ギャラリーくばた
4/11～16	第4回 ヌフ展 京都芸大 OB 仲間 上山八洲子、サトーキミエ、東樋口美智子、古川睦子、宮島みどり、柳田輝子、山崎和代、山本加代子、依田鏡子	京都府立文化芸術会館
4/11～16	第41回 Q 人の作品展 宇井恭子、奥田正子、奥田迪、貴志早苗、永谷正二、吉田恵美子	京都府立文化芸術会館
4/11～16	黒田暢・黒田富紀子展	ギャラリーヒルゲート
4/13～5/14	京都工芸の精華展 京都美大、芸大卒業生 他	中信美術館 ⑥
4/24～30、5/23～28	2nd Group 京 伊藤弘之、井上よう子、小曾根環、河合美和、城野愛子、善住芳枝 他	あかね画廊 ギャラリーあじさい
5/15～6/15	第3回 大阪御堂筋アート 小曾根環 他	御堂筋安土町ビル
5/23～28	17seasons 【17人の現在】 鳥越清敏、衣川雅之、ふるはし美鳥、山本俊夫、藤原二郎、堀川宏幸、小西真理、佐川俊浩、田中直子、野津寿子、福井研一、大志万伸子、河合啓行、真木智子、若林佳代子、堀内孝美、大原千尋	ギャラリーヒルゲート
5/30～6/4	2017 花と土と人展 京都市立芸術大学美術教育研究会東海支部及び東海在住有志	セントラル・アートギャラリー
6/5～7/2	Case Vol.000 "omnibus"ー『絵画的立体 または 立体的絵画』ー 安藤吉準 他	ギャラリー・ヴァイスラウム
7/18～23、7/26～8/6	いま、戦争の兆しに心いたむ美術家たちの作品展 PART3+4 京都芸大卒業生 他	ギャラリー佐野 GALLERY SUNMOON
7/18～23	2017 京都市立芸術大学美術教育研究会 双線美術 京都支部展	ギャラリー吉象堂
7/24～8/6	第一回 ゼロ年前後のゴーキアトリエ生 グループ展 北野祐江、黒瀬あや子、中村武俊、森本万智、山本知佐、渡邊久美子 他	アートギャラリー北野
7/22～8/2	ミニアチュール神戸展 vol.17 小曾根環 他	ギャラリー島田 ⑦
8/1～6	第32回 反核・平和のための小品展 京都芸大卒業生 他	ギャラリーかもがわ
8/4～8/9	第29回 4B展 京都市立芸術大学美術教育研究会 兵庫支部	南天荘画廊
8/25～27	東吉野アートプロジェクト2017 井上隆夫 他	丹生川上神社 ⑧
8/28～9/9	Painterliness 2017 河合美和、善住芳枝、中島一平、渡辺信明 他	ギャラリー白
9/13～17	2017 滋賀双線美術展 京都市立芸術大学美術教育研究会滋賀支部	守山市民ホール
9/16～10/15	神戸開港 150 年記念 港都 KOBE 芸術祭 小曾根環 他	神戸港
9/25～10/1	第38回 風土展 藤田清照 他	セントラルミュージアム銀座
10/8～14、10/18～22	第72回 新匠工芸会展 望月重延 他	東京都美術館、京都市美術館別館
10/20～22	ひらかたまちかど空間アートフェスティバル 月光荘 画室2	松岡由紀 他
10/28～11/12	「BENGALART」ベンガラート展 岡田親彦 他	旧片山家住宅 ⑨
11/18～23	日本画二人展 ー自然（じねん）ー 鳥越清敏 辻誠	トアギャラリー



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨

学内消息 (資料)

(2017年1月~12月)

1月14日~	1月15日	2017年度大学入試センター試験
1月28日~	2月12日	「外部連携事業／「未来の途中」プロジェクト「未来の途中の、途中の部分」 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
1月28日~	2月12日	2016年度申請展 鳥居本顕史「1より小さく0より大きい1」 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
2月 8日~	2月12日	2016年度作品展 (京都市美術館及び本学構内)
2月 8日~	2月12日	博士有志展「INTERIM SHOW2017」(大学構内)
2月18日~	3月 5日	美術学部同窓会展「1980年代再考のためのアーカイバル・プラクティス」 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
2月18日~	3月 5日	2016年度申請展 西條茜 + 嶋春香「Rhizome」 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
2月22日~	2月24日	京都芸大「境谷小学校レジデンス」平成28年度京都市立境谷小学校 作品展 (京都市立境谷小学校)
2月25日~	2月26日	2017年度美術学部入学試験
3月 3日~	3月 7日	2017年度大学院美術研究科博士(後期)課程入学試験 2017年度美術学部・大学院美術研究科博士(後期)課程合格発表
3月11日~	3月26日	退任記念「旅する布たち 一ひろいのおこ展一」 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
3月20日		国際会議 美術と社会的関与 Art and Community Engagement (元崇仁小学校)
3月23日		2016年度卒業式・学位授与式
3月23日~	3月30日	特別プロジェクト2016/状況のアーキテクチャー「Tracing Life: 生存の技法——ケア×アート」プロジェクト「オープンキッチン」成果展「Open Kitchen」(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA) 展
3月31日		ひろいのおこ教授、高橋成子教授退任
4月 1日		野田涼美特任教授、畑中英二准教授着任
4月 1日~	2018年1月	2017年度ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(イギリス)、シドニー大学(オーストラリア)、国立高等美術学校(フランス)、国立高等装飾美術学校(フランス)、ミラノ工科大学(イタリア)、アールト大学(フィンランド)、交換留学生派遣及び受け入れ
4月 8日~	5月21日	京芸 transmit program 2017(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
4月10日		2017年度入学式
4月11日~	5月14日	芸術資料館収蔵品展 第1期「動物画—京芸に棲むいきものたち」(芸術資料館)
5月11日		五十嵐ジャンス氏による特別授業「かたちを使うヒトのコミュニケーション」(大学会館交流室)
5月20日~	6月25日	芸術資料館収蔵品展 第2期「貌—ポートレート・マスク・ドール」(芸術資料館)
5月25日~	5月28日	第63回五芸芸術大学体育・文化交歓会(五芸祭)(東京芸術大学)
6月10日~	7月 2日	芸術資料館収蔵品展/状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト1「物質+感覚民族誌」パイロットプログラム「移動する物質——ニューギニア民族資料」 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
7月 1日		創立記念日
7月 1日~	8月 6日	芸術資料館収蔵品展 第3期「新収蔵品展 2016-2017」(芸術資料館)
7月 8日~	7月23日	2017年度学内申請展「シンフォニー LDK」 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
7月 8日~	7月23日	2017年度学内申請展 笹岡由梨子「Hello Holy!」
7月 8日~	7月 9日	京芸 transmit program ART OSAKA version 迎英里子「アプローチ7」 (ホテルグランヴィア大阪)
7月11日~		「京の七タ」地下鉄二条城前駅、「出逢い」—京の七タをテーマに、デザイン科2回生の学生の作品を展示
7月25日~	7月27日	2017年度京都市立芸術大学 総合基礎実技展「遊び場を広げる」(大学構内)
8月 1日~	8月10日	京の七タ(堀川会場他)
8月 5日~	8月13日	災害復興支援・芸術活動支援チャリティオークション「SILENT @KCUA 2017 (サイレントアーク)」(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
8月 5日~	8月20日	2017年度学内申請展 唐仁原希・吉田美希子「Septile」
8月 6日		美術学部オープンキャンパス(本学構内)
8月 8日~	8月13日	サマーアートスクール(大学構内)
8月 9日		夏休み子ども写生大会(京都市動物園)
8月11日~	8月13日	同時代学生陶芸展(堀川御池ギャラリー)
9月 2日~	10月15日	東アジア文化都市2017京都 アジア回廊 現代美術展 特別連携事業 身体0ベース運用法「0 GYM」(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
9月19日~	10月22日	芸術資料館収蔵品展第4期「東アジア文化都市2017京都開催記念① 東アジア 美の競演/饗宴」(芸術資料館)
9月23日~	11月 5日	京都市立芸術大学移転整備プレ事業/状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト7「Far Away/So Close: 開かれた共同体」still moving 2017: 距離へのパトス—far away/so close (元崇仁小学校とその周辺)
10月18日		アリン・ルンジャン氏による特別授業(大学会館交流室)
10月22日		サマーアートスクール「中高生に向けたデザイン基礎講座」(大学構内)
10月24日		Tim Parry-Williams氏による特別授業「国境を越えて知覚する」(新研究棟 大会議室)
10月28日~	11月26日	アリン・ルンジャン「モンクット」(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
10月28日~	12月 3日	芸術資料館収蔵品展第5期「東アジア文化都市2017京都開催記念② 古画を活かす 保存修復専攻の学び」(芸術資料館)
11月 3日~	11月 5日	京都市立芸術大学芸大祭2017
11月12日~	11月17日	2018年度大学院美術研究科修士課程入学試験
11月21日		Dr.Sarah Simblet(本学客員教授)による特別授業「ドローイングの多様性」(新研究棟 大会議室)
11月24日		2018年度大学院美術研究科修士課程合格発表
11月30日~	12月10日	第28回留学生展(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
12月 2日~	12月10日	状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト3「うつしから学ぶ」ワークショップ・成果発表 (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
12月15日~	2018年1月8日	退任記念 西田真人展—絵事循環— (京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)
12月16日~	12月17日	THE GIFT BOX 2017 アーティストが提案する特別なギフト(京都文化博物館別館ホール)
12月20日		状況のアーキテクチャー 2017 プロジェクト1「物質+感覚民族誌」スピノフプログラム ヴィンセント・ムーン×contact Gonzo ×川瀬慈 トークセッション&ヴィンセント・ムーン映像上映(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA)

事務局だより

同窓会関係者や同窓生を名乗って、個人情報聞き出したり、物を売りつける事例がありますのでご注意ください

同窓会からの案内は、同総会の所在地(大学内に設置)や電話番号が正しいことを必ず確認して対応ください。不審な点があれば同窓会へ電話ですぐに問い合わせして下さい。

「同窓生名簿 2015」の頒布について

2015年7月発行の「同窓生名簿2015」はまだ在庫があります。ご希望の方は、代金3,500円(送料込)をご送金下さい。折り返し送付いたします。ただし、同窓生一人1冊を原則としていますので既に2015年版名簿を購入された方は購入できません。

振込先：郵便局に備え付けの振替用紙(青色)を使って送金下さい。

口座番号：01030-7-12844

加入者名：京都市立芸術大学同窓会

通信欄：同窓生名簿2015購入と記載の上、氏名、卒業年、専攻、住所(送付先)、電話をご記入下さい。

▶次の場合は、事務局までご連絡ください

●同窓会後援名義使用

同窓会会費を納入されている会員が主宰する作品展など(個展、グループ展)で同窓会の後援名義使用を希望される方。

●展覧会の案内、情報をお寄せください

同窓会へ送っていただいた展覧会の案内や情報は、同窓会ホームページや会報に掲載しています。

●満80歳以上の会員で会費免除を希望される方はご連絡ください

過去10年間同窓会会費を継続して納入いただいていた満80歳以上の会員で希望される方は年会費を免除できます。

●氏名、住所、電話、FAXなどを変更された時

お忘れになると会報などの情報をお届けできなくなりますので郵便、FAX、メールなどの方法でご連絡ください。同窓会ホームページの住所変更フォームからも変更できます。

同窓会会費の納入をお願いします

会報封筒に郵便振替用紙(赤色)が同封されている方は、近年の会費が未納になっていますので、お支払いくださいますようお願いいたします。会費は年額千円です。終身会費納入制度もありますので、ご希望の方は終身会費の金額などを同窓会事務局へお問い合わせください。(既納会費によって終身会費が異なります)

編集後記

●平成が始まり、今年で早や30年、小淵官房長官が、『平成』と書かれた色紙が入った額を掲げた場面を、ついこの間のことのように思い出されます。時代の変遷を象徴する一場面でした。

来年の5月1日には、新天皇即位に伴い、再び改元されることとなり、「昭和は遠くになりけり」といった感があります。

この新しい時代に芸大も新天地、崇仁地区でスタートすべく、2023年の移転に向け、公募型プロポーザルにて設計者が決定、2020年度の工事着工予定で計画が進んでいます。

現在、崇仁地区は工事着工までの間、芸大生もデザインなどで参画した屋台村プロジェクト「崇仁新町」や「作品展」の展示場所としても有効活用されています。

●同窓会象の会の活動として、昨年の芸大祭にて「象の店」が5年目の開店を迎えました。今や常連の店として、皆様が毎年楽しみにして下さる存在となりました。

現役の学生から同窓生や職員の方々など、幅広い年齢層の交流の場であり、楽しい時間を共有できる場として、同窓会の大切な活動のひとつとなりました。

●今年も象の会は、本会報を通じて、さまざまな情報を発信し、少しでも大学、学生、同窓生を繋ぎ、会の活性化に努めてまいりたいと考えております。皆様からの情報やご意見をお待ちしております。

(会報編集委員長：阿部 緑)



京都市立芸術大学美術学部同窓会 象の会
ホームページ
<http://www.kyogei-ob.jp>